校長室だより

松江東高等学校

第３号

令和５年５月 11 日

○「猿は文化的か」

「多文化共生」、「多様性」は、私たちが生きる「社会」では大切であることは言うまでもありません。例えば「多様性」という言葉を耳にする時、LGBTQ+や障がいがある人などマイノリティに関することが話題になっていることがあります。それは、これまでも社会に存在していたにもかかわらず、社会からの十分な理解を得られず苦しい思いをしてきた人たちに、社会の目が向けられるようになってきたこととも言えます。**「一部の人を閉め出す社会は、もろくて弱い社会である。」**と、1979 年の国際障がい者年行動計画で言っています。いじめも同じです。

人間は、歴史や地域、文化によって異なった社会をつくります。一方、猿はいつでもどこでもほぼ同じです。人間は、複雑なことや現実の出来事を、記号化するなどして共通のものとして認識することができます。例えば、炎を見て漢字で「火」と記号化・言語化することができます。だから会話が成り立ち、コミュニケーションが活発化し、お互いの理解も深まります。

さかな屋さんでは、魚市場ほどではないでしょうが、魚の専門知識のある店員が客との会話を通して売っていきます。スーパーなどでは、魚の説明が書かれていることはあっても、店員と客がお互いに会話をすることが前提になっていないことが多いため、さかな屋さんほど会話はありません。コンビニでは、買い回りする際に商品について店員と会話することはほとんどありません。会話が、社会の変化、文化や技術の発達とともに少なくなってきました。私が高校の頃にウォークマンが登場しました。猿がウォークマンを聴く姿のＣＭが人気でした。今はスマホを高校生ならほとんど持っています。自分だけの音楽・世界に浸れます。昔はＴＶも家に１台しかなく、子どもも大人の演歌を聴かされました。今は自分の好きな世界に閉じこもることができ、それが他者への理解力やコミュニケーション力の低下につながることがあります。

人間社会を芸術に例えると、文化は共通の記号で書かれた台本（シナリオ）、社会はそれをもとにした演劇、人間はその演技者とも言えます。それぞれが思い思いの演技者になることは、台本がある以上制約が発生することがあり、またそれぞれに社会から役割が与えられることがあります。「〇〇～らしく」という言葉で、あいまいな役割を与えられることもあります。例えば、「高校生らしくしなさい」･･･それは抽象的で、個々で受け止め方も違ってきます。大枠のイメージや役割がある一方、正解もないので余計に苦しくなります。そうした社会的・文化的につくられた役割を打破するのがジェンダーの考えの基本だと思っています。

猿と違って、人間はコミュニケーションができ、文化を持ちます。しかし、多文化共生、多様性が認められない社会だと、共通化が行き過ぎたり、一定の基準での集団の囲い込みがおきたりして、差別や戦争などがおこります。対立ではなく、対話を重ね、意見が違っても認め合い助け合って行こうとする気持ちが、気遣いだと思っています。小さな気遣いを積み重ねて、居心地のよい学校や社会にして行きましょう。